

特集 「もう一つの「学都」岡山の物語 ——閑谷学校を中心とする近代東アジアネットワークの研究——」

序

遊佐 徹

「かつて岡山は実に「学都」であった」

『青踏』創刊の辞を意識した惹句を掲げてまでこのように断言するのは、300年前、ここ岡山の地に閑谷学校が創設され、歴史を重ねてきた事実による。

世界遺産への登録をも目指している閑谷学校については、改めて詳しい説明を施す必要はないことだろう。その寛文十年（1710年）の創設当初より庶民のための教育機関として機能し、あまたの人材を輩出してきた伝統と実績は、近代的意味において岡山に「学都」という称号を与えるうえで申し分のない条件を付与するものである。それゆえ、世界教育史、文化史のレベルでも高く評価されるこの閑谷学校に対しては、これまで地域の研究者を中心に多くの研究、顕彰が加えられてきた。そうした努力によって、私たちはいま閑谷学校の歴史、運営の実際、特質等について様々な知識を入手し得る状況にあるが、その内容は、一般的にドメスティックな関心に基づくものであり、明治維新以降、そこに学んだ多くの人材が中国を中心とした東アジアに雄飛し、多彩な活躍を繰り広げた事実と経緯を必ずしも大きな関心事とするものではない。閑谷学校の出身者、関係者のなかには、上海の日清貿易研究所（のちに、東亜同文書院へと発展する）に学び、やがてアジアとの連携、連帯の実現を目指し、さらには犬養毅や近衛篤磨ら政治指導者等との人脈を形成して日本の対アジア政策のイデオログの一翼を担うことになった人々がいたということは近代の閑谷学校を語るうえで欠かすことの出来ない重要な事実なのである。

研究プロジェクト「もう一つの「学都」岡山の物語」は、この点に着目することで、かつて閑谷学校がグローバルなレベルにおいてもわが国を代表する「知」の中心地として機能していたことをアジア知の蓄積、実業との関わり、日本の対アジア観の形成、政治活動との繋がり等の多方面——それらを総合した時浮かび上がってくるのが「東アジアネットワーク」というキーワードである——から解き明かすことを目指したものである。

具体的には、明治初期、閑谷で陽明学を講じた山田方谷、山田の高弟でのちに明治の三大文宗に数えられる三島中洲、山田亡き後閑谷学校を再興し、校長として教育に専心した西穀一（号は薇山）、西の娘婿で当時上海に設立された日清貿易研究所に学び、のちに指折りの中国通実業家として活躍する白岩龍平とその妻艶子、同じく西の薫陶を受けて日清貿易研究所に学び、若い命を中国に散らした福原林平と河本磯平、白岩に薫陶を受け、日本と中国を舞台に縦横無尽の活躍をした岸

田吟香、中央政界の実力者として、また当時の代表的なアジア主義者として白岩らと行動を共にした犬養毅や近衛篤磨等、これら岡山出身者を中心とする錚々たる人物によってこの「学都」岡山の物語は紡がれてゆく。

閑谷学校——この土庶の別なく岡山という地に開かれた学校には、激動の時代にふさわしい高い志と逞しい知性を有した人物が集っていた。とりわけ山田方谷の後を承けて校長となった西毅一は、列強がアジアに迫るなか、「皇国と漢土は唇齒の如し、最も相親しまざるべからず」と述べ、自ら中国に渡るほどの熱血漢であった。こうした彼の薫陶を受けた閑谷学校の若者たちは、その少なからぬものがアジアの連帯を夢見て中国へと渡ったのである。日清貿易研究所は美作出身の岸田吟香らの資金提供によって上海に設立された学校で、日中の貿易を盛んにし、経済を発展させることで欧米からアジアを守る、というのが設立の理念であった。この日清貿易研究所はこののち日本の一大中国研究機関・中国通養成機関である東亜同文書院へと発展する。「中外の実学を講じ、中日の英才を教える」ことを建学の理念としたこの学校は、学生にチームを組ませて、中国全土はもとより東南アジアにも及ぶ大調査旅行を課したことで知られるように、「実践知」を極めて重視した学校であった。その燦然たる成果である『支那省別全誌』は、今日に至るまで学界に裨益している。閑谷学校から巣立ち、中国へと渡った若者達は、この日清貿易研究所＝東亜同文書院に学び、また実践に励むなかで、今日からは想像もできないほどのバイタリティーを培っていった。なかには戦場の露と消えたもの、異国の地に自刃したものもあったが、その志に従って中国で刻苦奮闘し、実業家として功成り名遂げたもの、中国の改革・革命運動を無心に支援し、興亜の夢を中国人とともに追ったものもあったのである。

本研究プロジェクトでは、こうした閑谷学校に集い、夢を追ってアジアに輝いたもの達の軌跡を、彼らの「東アジアネットワーク」——アジア知の蓄積、実業との関わり、日本の対アジア観の形成、政治活動との繋がり等——に留意しながら、たどる活動を1年間に渡り進めてきたが、その成果として2016年3月16日に岡山大学において研究集会「もう一つの「学都」岡山の物語——閑谷学校を中心とする近代東アジアネットワークの研究」を以下のような形で開催するに至った。

- 1、閑谷巒から日清貿易研究所へ——福原林平とその日記『随感随録』について
土屋 洋（岡山大学大学院社会文化科学研究科 准教授）
- 2、『対支回憶録』の編纂過程と「日清貿易研究所生一覧表」
野口 武（愛知大学東亜同文書院記念センター ポストドクター）
- 3、白岩龍平の徳望
村上節子（備前市加子浦歴史文化館 学芸員）
- 4、修猷館から日清貿易研究所へ——向野堅一を形づくるもの——
向野正弘（向野堅一記念館館長）

5、文廷式の来日と東亜同文会

遊佐 徹（岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授）

6、東亜同文書院と岡山県からの入学者について

藤田佳久（愛知大学東亜同文書院祈念センター フェロー）

—報告順、敬称略

本特集は、その際の報告をもとに企画されたものである。この場を借りて、お忙しいなか貴重な御報告を賜わり、また文章化の労をお執りいただいた報告者の皆様方に厚く感謝申し上げます。